[エッセイ]

手塚治虫と私の縁

田中　昭
75期

前号に引き続き、私の趣味について書かせて頂く。今回は、漫画家の手塚治虫関連である。昭和の子供の例外ではなく、私も小学校後半から中学校にかけて漫画の大ファンだった。中でも手塚治虫は抜きん出て面白かった。“漫画少年”連載の「ジャングル大帝」や“少年”連載の「鉄腕アトム」は待ち遠しかった。友達と相談しあって購入する雑誌を決めて、貸しっこをした。また沢山あった貸本屋で借りた本も回し読みをし合った。今と異なりすべての少年・少女向け雑誌が月刊だったので、連載の続きは1か月待たねば読めなかった。その待ち遠しかった事。手塚作品は（他の漫画家と違って）ストーリーの斬新さ、映画感覚の絵のうまさ、啓蒙的内容などの点で際立っていた。考えてみると漫画家という職業は大変だ。原作者・台本作家・脚本家・演出家・作画家（手塚治虫は作中で出演までしている）としての役割をたった一人でこなさねばならないのだ。これは大変なことで、よほど多彩（多才）な才能に恵まれなければ一流の漫画家にはなれないと思う。多くの漫画家が数年で消えていく中で、手塚治虫は18歳の医学生時代のデビューから60歳の死去(若い。42年間睡眠時間3～4時間という生活を続けていた。医者の不養生の典型だった）まで一流漫画家の地位を保ち続けた。幼い日の私の眼に狂いはなかったのである、と自慢したい。手塚治虫の作品については、講談社の全集（全400巻!!）をはじめとして大量の出版物がある。これらの作品群を説明していてはいくら紙数があっても足りない。なにせ42年間の漫画家生活で描いた作品が700作以上、描いたページ数の総計が15万枚以上、さらにアニメ作品が60作以上と言われている人である。そこで今回は、私と手塚治虫の個人的「縁」について書いてみたい。私の一方的思い込みもあろうが、その点はご容赦願いたい。また記録が手元にあるわけではなく、思い出しながら書いているので話があちこち飛ぶこともあると思う。その点もお許し頂きたいと思う。では「手塚治虫と私との縁」を中心に以下に列記してゆきたい。

1．北野中学・北野高校

1960年に大阪府立北野高校に入学して、手塚治虫が先輩であることを初めて知った。その瞬間は合格した時よりも嬉しかった。私は兵庫県の某有名私立の中高一貫校の入試に失敗していた。そこで中学は寄留・越境通学（国鉄の甲子園口／塚本間）して北野を目指した。大好きな手塚治虫が北野の大先輩と知って以来、私を落としたその私立中高一貫校には感謝している。落としてくれたので、手塚治虫の後輩になれたからである。手塚氏の在学は1941～45年であり、私は1960～1963年在学なので入学時で19年、卒業時で18年後輩に当たるわけである。私の入学は戦後15年目なので、北野には手塚治虫に教えたという先生がまだ在職されていた。体育のH先生は、ニックネームが“ビンタ”で戦時中は体罰で有名だったそうだ（私の頃はさすがにビンタを取ることはなかった)。H先生は夏は水泳ばかり教えていた。数ある大阪府内のプールで、日本水泳連盟の公式プール（記録が公式なものと認められる）は大阪市営の扇町プールと我が校の二つだけだと何度も聞かされた。そう

いえば北野のプールではしょっちゅう他校や府・市の大会が開かれていた。さらに我が校のプールは戦時中に全校生徒の勤労奉仕で作られた、とも聞かされた。手塚自身も自伝の中でプール作りに触れていた。その後このプールの更新工事が同級生の勤めるゼネコンの手でおこなわれたが、解体中にプールが「竹筋コンクリート」であることが判明した。戦時中で金属供出が行なわれ鉄筋が手に入らなかったので、鉄の代用品としてよく乾燥させた竹にコンクリートをかぶせて作っていたのである。手塚自伝にはそこまでは書いてなかった。美術の岡島先生は手塚を可愛がったことで名高い先生だった。座学の時に誰かが「あの手塚治虫はどんな生徒だったんですか？」と持ち掛けると相好を崩して滔々と説明して下さった。本当はモネ・セザンヌ・ゴッホ・ピカソなどの授業の筈だったのだが…。

余談になるが私はナマの手塚治虫は一度しか見たことがない。それは1973年の北野創立百年記念祭だった。場所は大阪中之島のフェスティバルホールだった。この祝祭の主役は、OB の森繁久彌と手塚治虫だった。手塚は即興で見事な漫画を描いて見せた（あの原画はいまどこにあるのだろうか？ 大変な価値があると思うのだが)。私の同期のあいだでは、来年の創立百五十年祭は誰が主役かという話題が時々出る。私の予想では、橋下徹と有働由美子が司会者で締めはノーベル賞の吉野彰氏だと思うが果たして誰になるのだろう。

余談ついでに書くと、私の学年は“悲劇の学年”と前後の期の人たちから呼ばれているらしい。同期生の中で一番最初に亡くなったのは、例の連合赤軍事件の森恒夫君である。彼は在学中剣道部主将の硬派学生だった。私は今でも彼が大阪市大に進学しなければあんな結果にはならなかっただろうと思っている。（よど号事件の犯人の大部分は大阪市大の関係者だった。それ程当時の大阪市大の文科系学部は赤かった。森君はそんなことは全く知らずに同大学に進んだと思う)。もう一人は、JR 福知山線事故の時の JR 西日本の社長だった垣内剛君である。彼は国鉄民営化を推進した旧・国鉄の経理屋で、事故には殆ど責任は無い筈だが運悪く事故の時の社長であったので責任を取らされた。気の毒としか言いようがない。社長になった時に同期のお祝い会で「国鉄総裁ならたいしたものかも知れないが、８～９社に分社後の一社の社長やからウン分の一の価値や」と謙虚に語っていたのが忘れられない。

2．昆虫＆クラシック音楽好き

私は高校在学の３年間、生物研究部に所属していた。主に蝶の採集のためである。手塚治虫も昆虫が大好きで北野中学在学中に、友人と共に「昆虫同好会」を創設して会報や自作の図鑑を作ったりしている。それらの出来栄えは素人離れしている。そもそも手塚の本名は手塚治である。甲虫の一種に、オサムシという肉食の真っ黒な虫がいる。手塚はそれを知って自分のペンネームを治虫（オサムという本名と同じ読みにした）としたわけである。初期にはわざわざオサムシとフリガナを書いているサインもある。図鑑の蝶の絵などは写真と見紛うばかりの出来である。戦時中で赤い絵の具がどうしても手に入らず、指を切って出た血で彩色したという話も伝わっているが、これは眉唾だと思う。読者の皆様ならよくご存知だと思うが、血液はすぐ凝固するし凝固すれば色はまっ黒になる。今宝塚市立の手塚治虫記念館で展示されている図鑑の

赤色は今でも鮮やかである。血を使ったというのは、神格化を狙ったデマだと思う。手塚は仕事人間で趣味は映画やクラシック音楽鑑賞くらいだった。クラシックはかなり巧みにピアノが弾けた。レコードも沢山所有していた。執筆中に大音量でLPをかけていたのは有名である。フルトヴェングラーが好きで「ブラームス交響曲第1番」や「チャイコフスキー交響曲第6番：悲愴」は、フルトヴェングラー指揮のLPばかり聴いていたという。その点でも私は「縁」を感じている。

3．父親の会社が同じ

これも「縁」の一つだと思うのが、手塚の父親と私の父の勤務先が同じ会社であった事である。大阪に本社があった大手製鉄会社・住友金属工業（現・日本製鉄）がそれである。手塚の父親は経理部、私の父は総務部だったからおそらく二人は同じフロアーで働く顔見知りだったと思う。しかし不思議なことに私の父は手塚氏の父親が同じ会社に勤務している、とは家で一度も言わなかった。私の父が、同僚の経理部の手塚氏の息子が有名な漫画家である事実を知らなかったのか、息子（私のこと）にそれを言って色紙でも頼まれるのが煩わしかったのか。あるいは手塚氏の父親が、息子が有名な漫画家であるのを会社では決して口にしなかったのか？ 二人の父親がとっくに亡くなっているので今となっては確かめようがない。

ことのついでに手塚治虫の生い立ちについて書いてみたい。大阪弁で一言でいうと「ええしのぼんぼん」である。名家の出と言ってよいと思う。父方から調べてみると、治虫の曽祖父は手塚良仙という医者である。緒方洪庵の適塾でオランダ医学を学び、のちに西南戦争に従軍中に戦病死している。治虫はこの曽祖父の良仙を主人公に「陽だまりの樹」という作品を書いている。祖父は手塚太郎といって裁判官で長崎控訴院（現在の高等裁判所）を最後に退官し、隠居所として宝塚に家を建てて住んだ。5歳の治虫が豊中から移り住んで、大学を卒業するまで約20年間過ごしたのはこの家である。父の手塚燦（ゆたかと読む）は前述のように住友金属で働くサラリーマンだった。中央大学卒で趣味豊かな人だった。写真は相当な腕前で、ドイツ製のライカを使い関西では有名なアマチュア写真家であった。当時手塚家に遊びに行った小・中学校の友人によると応接間には、縦型ピアノ・電蓄が置かれ、本棚には“岡本一平全集”、“北沢楽天全集”、“のらくろ単行本”などがズラッと並んでいたという。新し物好きな父は、フランス製のパティベビーの映画撮影機（小型でポータブル）をもっていて、治虫や学友を撮ってくれたという。今でも治虫の追悼番組などで手塚家の庭のブランコに乗る治虫の姿が放映されることがある。とにかく戦前の生活では考えられないくらい文化的・経済的に非常に恵まれた環境で治虫は育てられたようだ。一方母方を見てみよう。母は手塚文子で、文子の父は陸軍少将・服部英男である。最終的に陸軍・輜重兵監を勤めていた。文子はピアノが上手で治虫に教えていた。家の近所に宝塚少女歌劇の大スターだった天津乙女や春日野八千代が住んでいたせいもあって、母は幼い治虫の手をひいて宝塚歌劇場に日参していたらしい。後年治虫が「リボンの騎士」などの少女もの漫画を描くことが出来たのはその基盤があったせいである。

4．近くにトキワ荘

マンガ好きの方の間では「トキワ荘」は有名なアパートである。1952年から1982年まで

東京都豊島区に建っていた。私の家から歩いて10分位の所である。木造2階建てで2階の10室が賃貸だった。1室は4畳半で風呂・トイレなし（共用）だった。戦後の典型的な安普請アパートである。現在トキワ荘の跡地には、豊島区立の立派な「トキワ荘マンガミュージアム」が建っていて、トキワ荘が忠実に復元されている。ここでは手塚治虫の原画や作品、さらにかってここに住んだ有名漫画家の作品を見ることが出来る。このアパートがなぜそんなに知られているのか？

それはまず手塚治虫が1953年に入居したあと、後世有名になる漫画家が続々とこのアパートに住んだからである。名を挙げると、藤子不二雄・赤塚不二夫・石ノ森章太郎・寺田ヒロオ・つのだじろう・長谷邦夫・水野英子たちである。今やトキワ荘は“日本漫画の聖地”と呼ばれている。

5．大学の親友

大学の一番の親友に鹿子木（かのこぎ）昭一君がいた。京都の生まれ育ちで京都府立洛北高校OBだった。大学で比較的数少ない、同じ関西出身なので口をききはじめたのが交際開始の端緒だった。有名な画家の孫で、南極越冬隊長の故・西堀栄三郎氏の甥(?)だったと記憶する。とにかく面白い男だった。その彼が小学館に入社して少年サンデー編集部に配属され、何と手塚治虫担当になったのである。この奇縁にわたしは驚き狂喜した。今はどうか知らないが、我々の頃のマスコミの入社試験は指定校・成績足切りなしの「全員入社受験 OK」の時代だった。鹿子木君は同世代の例外ではなく“マンガ大好き人間”で、落ちてもともとで小学館を受けたわけである。5人の合格枠に受験者が1,000人以上という難関だったが、彼は見事に合格して小学館に入社した。そして手塚治虫を担当することになったのである。通称“手塚番”といわれる仕事で、とにかく仕事の取り込み過ぎで原稿が遅れがちな手塚から原稿を取るのが仕事だった。私はしめしめ鹿子木君経由で手塚治虫と会えるかも、などと夢想したがとんでもない話だった。同君は手塚の仕事場に泊まり込んで手塚を監視し、隙あらばと自社の原稿を先に書かせようと狙っている競合他社の“手塚番”をも監視するのが仕事だった。私に手塚を紹介するなんてとんでもない話だった。結局同君に手塚の単行本数冊を送ってサインをもらうのが精々だった。

残念ながら鹿子木君は30歳ちょっとで早逝してしまった。同君が元気でいたら、今頃二人で手塚治虫談議に花を咲かせることが出来ただろうに残念でたまらない。

6．その他

ここからは「縁」を離れて、ちょっとブラックな面を含めて手塚治虫について書いてみたい。

①年齢・学歴詐称

手塚は見栄っ張りなところがあった。1955年前後まで、手塚は1925年生まれと自称していた。本当は1928年生まれなので3歳サバを読んでいたのだ。理由はいくつかあったようだ。まず編集者や同業漫画家に”若輩者”と馬鹿にされたくない、という理由。もう一つは北野中学卒業後、旧制・浪速高校に進み3年後に大阪大学医学部に進学したと詐称するため。実際は1945年に北野中学を卒業し、旧制・浪速高校の入試に失敗し、代わりに大阪帝国大学付属医学専門部（略称・医専）に進学している。この医専というのは急増する軍医を急速養成するために1939年に設置されたものである。本来なら終戦と共に廃止され

る運命にあったのだが、医学部の教授たちの努力で終戦後も存続した。従って手塚の正式な学歴は「大阪大学付属医学専門部卒業」ということになる。なお医学博士号は1961年に奈良県立医大で取得している。博士論文は「異型精子細胞における膜構造の電子顕微鏡的研究（タニシの精虫の研究）」だった。

②舌禍事件、筆禍事件

手塚は見栄っ張りと同時に、嫉妬心が強かった。同業漫画家への高評価や、評論家の自作品への酷評などに対して過剰反応を示して喧嘩・絶交事件をよく起こしていた。私は具体的な事件の内容も相手も知っているが、余り愉快な話ではないのでこれ以上は書かないことにする。

③思い込みの激しさ

北野の校章は、中学の中の字を図案化した6つの稜をもった星形で表現されており、これを「六稜」（りくりょうと読む）と称している。土井晩翠作詞の校歌は「六稜の星のしるしを～」で始まっている。第2章で述べた手塚が創設した昆虫同好会も、正式には「六稜昆虫同好会」と称している。そんな六稜だが何故か手塚は稜の字を必ず「陵」と誤記していた。たぶん周囲から何度も注意された筈だが、この誤記は終生治らなかった。

またスタジオという英語のスペルを必ずSTADIO（正しくはSTUDIO）と作中で書いていた。手塚にはこのように一旦脳中にしまい込まれると直せないという性癖があった。

上記の性癖を指摘した漫画評論家・読者は皆無である。

7．コレクション

私は当初フルトヴェングラーと同様に全手塚治虫関連品の蒐集を目指しかけた。しかしすぐに諦めた。700作品はいかにも多過ぎる。しかも手塚は単行本化に当たって書き直しを行っているのだ。時代にそぐわなくなったセリフのみではなく、気に入らなくなったストーリー（ページ全体）の書き直しもざらである。これらをすべて揃えるのは到底無理だ、と悟ったのだ。そこで私は考えた。その結果は原画の蒐集である。原画は当然のことだが「世界に1枚」しかない。今では考えられないが、以前は著作権に関する意識・関心が薄く、漫画家はファンレターの返礼として原画をプレゼントするのが普通に行われていた。手塚治虫も例外ではなく、古い作品の原画が市場に出ることが多い。そこに目をつけて今私の手元には10数枚の原画がある。しかしパソコンが普及し、ネットオークションが盛んになってからの原画の値段上昇は著しい。カラー原画1枚が百万円を超える落札も多くなった。もう私の財力の限界をとっくに超えている。従ってこれ以上コレクションが増えることはないだろう。15万枚の原稿・原画中の10数枚を所有していることで満足せざるを得まいと考えている。

〈略歴〉

1944年大阪府生まれ。府立北野高校、慶応義塾大学卒業。住友重機械工業㈱に42年間勤務し、主に鉄鋼プラントの輸出業務に従事。退職後青山学院大及び関西学院大で非常勤講師。